

「第9次侵略を心に刻み語り継ぐ平和の旅」に参加して

富山県本部 入江純子

私は 2024 年 7 月 13 日～20 日にわたり「第 9 次侵略を心に刻み語り継ぐ平和の旅」(以下「平和の旅」)に参加し中国を訪れました。

帝国主義日本による中国への侵略戦争と言えば、今でも忘れられない思い出があります。それは学生時代、授業中に教授が話した言葉であり今でも鮮明に記憶に残っています。

「君たち、本当に南京大虐殺があったと思うかね。当時の南京の人口は 30 万人なんていないんだ。こんなの嘘っぱちだ。いいかね、こんな捏造を鵠呑みにしてはいけないんだよ」と。一瞬、我が耳を疑いましたが、心に何か引っ掛かり釈然とはしないものの、書籍を求めて自分なりに南京大虐殺の全容を紐解くことなどせず、惰性に流され歴史と正面から向き合うことなく過ごしてきてしまったのでした。

今回「平和の旅」への参加の話を頂いた時、「あの時から放置して手を付けずにいた歴史の事実を正面から直視する機会にしてみなさいよ」と、もう一人の自分に背中を押されているように感じたのでした。このことが、今回「中国の旅」に参加した動機のひとつでもありました。

この旅では中国人民抗日戦争記念館をはじめ、南京大虐殺遭難同胞記念館、侵華日 731 部隊罪証陳列館、東北陥落史陳列館、9・18 記念館、平頂山惨案記念館などを訪れるとともに、聞き取りとして、家族を目の前で殺害された常志强(常小梅の父)さんから聞いた話や性格、生き様などを娘の常小梅さんが私たちに語ってくださいました。戦後 79 年が経過し幸存者(生き残った人)の方が殆どおらず、「平和の旅」が始まって以来、初めて幸存者のご家族である娘さんよりお話を伺うことになったのでした。

家族を虐殺された影響で、父親はそれがトラウマとなり生涯苦しみ続けたとのことでした。忌々しい過去を回想させる語り部役は、娘さんにとっても辛い作業でさぞや負担になったに違いありません。話の途中で声が詰まって無言となり、涙をぬぐう場面もありました。語り部役を引き受けてくださったことには、感謝の言葉しかありません。



幸存者の娘 常小梅さん

私たちへの語りが終わりに近づいた頃、娘さんはこのようにおっしゃってくださいました。「皆さんがこのように当時の戦時中の様子を中国まで聴きに來たことを父が知ったら、とても喜んだと思います」と。思いもしない娘さんの言葉にとっても驚くとともに、このように未来志向の考えを持って私たちに接して下さった娘さんに頭の下がる想いでした。

そして、今回訪れた施設のうち、とりわけ侵華日 731 部隊罪証陳列館では大きな衝撃を受けました。館内では、人を人とも思わない残虐な手法で殺害する様子が写真をはじめ、ビデオ、展示品、人形、パネルより見て取れました。命を救うべき医師が、同じ人間として人体実験などに手を染めて良いのか。何もここまで執拗に行う必要が果たしてあるのか。狂気の沙汰とはこのことかと、怒りが込み上げやるせなさで胸が一杯になりました。

戦争は最大の人権侵害であると言われますが、そのような犯罪行為に彼らを走らせてしまうことが戦争なのだと思います。スパイ容疑者、捕虜、妊婦、子どもに加え、病に倒れ労働力にはならない者、感染症に罹患してしまった者は国のためになるなら仕方ないと、人体実験を正当化し人体実験用の



731 部隊罪証陳列館は平日でも 1 日約 1 万人が来場する

マルタとして実験材料として取り扱われていました。あまりの壮絶さに日本人であることが恥ずかしく、いたたまれない気持ちになりました。

また 731 部隊罪証陳列館を歩いていると、中国の小・中学校生の団体客や一般の家族連れが非常に多く来場されており、その混雑振りには大変驚かされました。これは私たちが訪れた行く先々の施設で出くわした光景でした。中国では歴史に対する関心が高く、たとえ幼い子どもであっても両親が分かり易く説明してあげてい

る姿があちこちで見受けられ感心させられました。それに引き換え、我が国はどうでしょうか。侵略戦争を否定し歴史教科書の内容も歪曲し正しい歴史教育には程遠いのが現状です。

さて、話は変わりますが、「自治労がなぜ平和運動に取り組むのか」、このことについて少し考えてみたいと思います。

誤解を恐れずに言うならば、私たち公務労働者は戦争反対か、はたまた戦争賛成かの二者択一しか選択肢はなく、傍観という曖昧な立ち位置はありません。戦争反対の意思を明確に示し、反戦を訴え行動に移さなければ、私もあなたも戦争に動員されてしまいます。戦争要員になるということは、必ずしも戦場に赴くことばかりではありません。自治体労働者は自衛隊への住民名簿の供出や港湾、空港などの軍事使用、自衛隊の基地建設など多くの業務が対象となり、戦争に賛成していなくても意図せずして結果的に戦争に協力することになってしまうのです。

改悪地方自治法が野党の反対を押し切り 9 月 26 日について施行となりました。これは行政が非常時に混乱するのを防ぐ必要があるとして、自治体に対する国の指示権を拡大できるという内容です。国会の議論なしに自治体を丸ごと戦時動員し閣議だけで指示、命令できるようにすることです。同時にそれは自民党が憲法改正の課題にあげている「9条明文化」と「緊急事態条項創設」に連動します。戦争する「新たな戦前の再来」は許せません。

法律が可決されたからと国に追随するのではなく、地方自治法改悪強行を弾劾しなければなりません。南西諸島の琉球弧へのミサイル配備、与那国島での対中国合同演習は戦争を挑発する行為であり一触即発の状態を醸成しています。強引に布石を打ち戦争準備を進める政府に、戦争絶対反対と声を上げ阻止しなければなりません。

今こそ、長期にわたり続いてきた自民党の一強独裁政権を打倒し、私たちの命と暮らしを守る運動強化が必要です。職場・地域から大衆運動を展開すべく、来年7月の参議院選挙では、反戦平和を訴える私たちの代弁者を国会に送り出し、政権交代を実現させましょう。誰もが安心して生活できる平和な社会をつくるため、家庭・職場・地域において一人ひとりが、何よりも平和が大切であることを訴えていかなければなりません。

中国から帰国してまもない8月中旬のことでした。北日本新聞を何気なく見ていたところ、ある記事にふと目が留まりました。それは「731 部隊元隊員 79 年ぶりに跡地に ハルビン 犠牲者追悼」というタイトルの記事で、石碑前で合掌し祈りを捧げている元隊員の方の写真も併せて掲載されていました。

満州にわたり約 5 カ月間、少年隊の一員となり 731 部隊で人体標本を見たり、部隊関連施設の爆破に加担したことを 94 歳の齢を重ねた今もなお後悔し続けており、犠牲者の方々に対し慰霊と謝罪をすべく訪中されたという内容でした。

戦争に勝ち負けはありません。この 731 部隊元隊員もまた戦争の被害者の一人なのです。

戦争加害者が受けた精神的苦悩も生涯癒えることはなく、生き地獄であるということを元 731 部隊の生き証人は自らの身を挺して物語ってくれています。この元 731 部隊隊員の訪中は中国メディアにも取り上げられていました。幸いなことに、「歴史の真相を直視する勇気を称賛する」との中国外務省報道官の発表コメントも書き添えられていました。過去の過ちを見つめ直し心より詫び改心することで、中国サイドの態度にも変化が見られていることに、心温まる思いがしました。

最後になりますが、虐殺に遭った中国の方々の無念さを考えると、命を与えられ、この瞬間にも生かされていることに感謝をせずにはいられません。この「平和の旅」を通じ、残された命をどのように活かしていくのか、どのように時間を使い社会貢献をしていくべきなのか、という問いを与えられたように思います。

また「平和の旅」と事前学習を通じ、努力なくして平和を守ることはできないのだということも強く実感させられました。悲劇の歴史が二度と繰り返されることのないよう、今後も「平和の旅」に仲間を送り出し現地での学習機会をつくること。そして、中国での学びを周囲の人々に伝えていく継続的な平和活動の取り組みが重要であると感じています。

平和の旅実行委員会では、毎年「平和の旅」を催行しています。全国各地より志願した仲間を中国に送り出し、帝国主義日本が侵略戦争を繰り広げた各地の痕跡を辿り史実を学んでいます。帰国後、自分が実際に目で見て聞き、学習した内容を語り部として仲間に伝え、侵略戦争を行った事実を風化させないよう平和活動を行っています。次世代に負の遺産を負わせることがないよう、世界の恒久平和のために一人ひとりができることは何かを考え、勇気を持って行動に移していきましょう。

みなさん、ともにがんばりましょう。



「前事不忘 後事之師」平頂山惨案紀念館の遺骨館 冥福を祈る場所